

國學院大學學術情報リポジトリ

研究ノート

國學院大學博物館収蔵の「吹上」遺跡関連動物遺体資料の再整理：複数か所の同名遺跡資料を分類する

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 阿部, 常樹, 猪熊, 花那子, 畑山, 智史, 山崎, 京美 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001924

國學院大學博物館収蔵の 「吹上」遺跡関連動物遺体資料の再整理

— 複数か所の同名遺跡資料を分類する —

阿部常樹¹⁾・猪熊花那子²⁾・畑山智史³⁾・山崎京美⁴⁾

はじめに

本学博物館には、「吹上」遺跡関連資料が収蔵されている。筆者らは、その内、動物遺体資料に関して報告をおこなうため再整理・分析をはじめた。しかし、整理の過程で本資料のなかには、内湾の干潟および砂底、砂泥底域に生息するもの（松島1985・富岡1999）で構成されているものと、沿岸の砂礫底や岩礁域に生息するもの（松島1985・富岡1999）で構成されているものといった、2種類のまったく異なる海域に生息する貝類遺体群が含まれていた。我々が当初、念頭においていた「吹上」遺跡は、埼玉県和光市（旧大和町）吹上貝塚であった。それゆえ、本貝塚に近接する縄文時代当時の海域環境は、内湾砂底もしくは砂泥底と推定したが、沿岸の砂礫底や岩礁域の資料群は本貝塚で発掘されたものとは考えにくいものであった。国内には、埼玉県和光市吹上貝塚以外にも、たとえば東京都日野市吹上遺跡や、茨城県稲敷市吹上貝塚、つくば市大曾根吹上貝塚、大洗町大洗吹上遺跡など、「吹上遺跡（貝塚）」と称される遺跡は多い。つまり、同名の異なる遺跡の資料が収蔵されてからの長い年月を経るなかで、混同されてしまった可能性が考えられる。そこで、本論では、これらの「吹上」遺跡出土資料群を再分類し、さらに、再分類された資料群ごとに出土した遺跡を確定する作業をおこなう。（阿部）

I 分析方法

出土した遺跡を確定するための作業をおこなうにあたって、具体的に、以下の4つの分析をおこなう。なお、今回の一連の分析をおこなうに際して、我々は、埼玉県和光市吹上貝塚（2016年4月25日）及び茨城県東茨城郡大洗町大洗吹上遺跡（2016年8月23日）を踏査し、さらに土壌などの分析資料の採取をおこなった。

1. ラベル・注記などの文字資料からの検証

まず、資料群に付与されているラベルや注記などの文字情報から検証をおこなう。なお、扱う資料は、動物遺体に限定している。その前に、数ある「吹上」遺跡の内、國學院大學博物館に寄贈されているもの、さらに、本学が調査に関わっているものを抽出し、その調査期間、調査の際の遺構や貝層の層位などの名称の記載方法などを調査する。その調査結果と、本資料に付されているラベルや注記の記載内容と比較検討し、帰属する遺跡を推定する。（阿部）

2. 収蔵されている貝類遺体の組成からの検証

次に貝類遺体の組成からの検証をおこなう。上述したように、「吹上」資料のなかには、生息域の大きく異なる貝類群集が2群存在する。Ⅲ章で推定された遺跡の過去の発掘調査で報告されている貝類遺体の組成との比較はもちろんのこと、それらの遺跡の立地から当時の周辺の海域環境を推定し、その環境下で生息する貝種との比較をおこなう。 (阿部)

3. 共伴する人工遺物からの検証

さらに、今回の一連の整理では対象としていないが、共伴する人工遺物、特に土器と石器についても検証をおこなう。まず、土器の型式によって時期の検討をおこない、Ⅳ章までの分析によって推定された帰属遺跡の発掘調査報告書とそれらが符合するかを検証する。また、石器は特に石材からその産地などを推測できる可能性がある。そこで、土器と同様に発掘調査報告書との適合性を検証する。 (猪熊)

4. 資料とともに持ち込まれた土壌からの検証

粒度組成の差異より、土壌サンプルの由来を明らかにすることを目的として、0.5mm、0.3mm、0.13mm、0.10mm、0.07mm、0.05mmの6種類の篩を用いて、粒度を7種類に分別した。篩作業は、筒井理化学器械株式会社製マイクロ型電磁振動ふるい器M-2型を使用した。10分間の篩作業時間を実施して、篩上に残存する土壌の体積を求め、粒度組成とした。予備実験として、事前に大洗吹上遺跡の表土と和光市吹上貝塚の表土のサンプリングを実施し、その地域における粒度組成の特徴を抽出した。 (畑山)

Ⅱ 國學院大學に關係の深い「吹上」遺跡

まず、國學院大學に關係の深い「吹上」遺跡について概観する。その遺跡は、①茨城県東茨城郡大洗町大洗吹上遺跡、②東京都日野市日野吹上遺跡、③埼玉県和光市吹上貝塚である(図1)。以下、それぞれの遺跡の概略と國學院大學との関連性について述べる。

1. 茨城県東茨城郡大洗町 大洗吹上遺跡

大洗吹上遺跡は、茨城県東茨城郡大洗町磯浜吹上に所在する。地理的には、大洗台地の西南端にある。本遺跡内の台地西側斜面に、北から南へA貝塚、B貝塚、C貝塚の3つの地点貝塚が並ぶ。その内、C貝塚は、昭和47年(1972)の報告によると、すでに消滅し痕跡もとどめていないとされている。東側には、縄文時代の竪穴住居址が1軒検出されている。縄文時代中期から晩期にわたる



図1 3つの「吹上」遺跡の位置

土器が出土しており、主体は後期初頭の称名寺式期である（酒詰 1961、上川名・編 1972）。

本遺跡の本格的な調査は、昭和43年（1968）12月に上川名昭氏によって実施されたのが最初である。1次調査は、上川名氏が自費でおこなったが、その翌年の昭和44年（1969）に町に委託される形で氏を中心に2次調査がおこなわれた。その1次と2次調査の成果は、昭和47年（1972）に刊行された報告書にまとめられている（上川名・編 1972）。報告によると、1次調査ではA貝塚とB貝塚それぞれの上層の調査がおこなわれた。2次調査ではB貝塚の完全調査による層位の確認と、生活の場である台地部分の調査も併行しておこなわれた。

その後、昭和50年（1977）に3次調査（宮田・編 1979）がおこなわれた。本調査では、貝塚部分の調査はおこなわれておらず、動物遺体は検出していない。

なお、國學院大學博物館には、平成14年（2002）に上川名昭氏のご遺族より寄贈をうけた考古資料があり、そのなかに、茨城県大洗町大洗吹上遺跡出土資料が含まれていた（國學院大學考古学資料館 2005）。

2. 東京都日野市 日野吹上遺跡

上川名氏に関わった「吹上」遺跡で、もう一つ東京都日野日日野吹上遺跡がある。しかし、先述した上川名昭氏寄贈資料のリスト（國學院大學考古学資料館2005）のなかには、本遺跡のものは含まれていない。

日野吹上遺跡の1次調査は、昭和42年（1967）2月26日から同年3月9日の12日間おこなわれた（上川名・編 1970）。その発掘調査は、上川名氏が責任者として、國學院大學考古学研究室に所属する学生が主体となっておこなったとされている（上川名・編1970）。本調査では、縄文時代から古墳時代にかけての遺物・遺構が検出している。但し、貝類をはじめ動物遺体は出土していない。その後の調査においても動物遺体は出土していない（日野市遺跡調査団1976、日野市遺跡調査会1989など）。つまり、少なくとも、筆者らが整理をおこなう動物遺体に関しては、日野吹上遺跡に関連するものはないと考えられる。

3. 埼玉県和光市 吹上貝塚

吹上貝塚は、入間川溪谷右岸の貝塚で、白子川にのぞむ洪積台地上にある（埼玉県 1980）。時期は、縄文時代中期後半（勝坂・加曾利E式期）を中心とする。

最初の発掘調査（1次調査）は、昭和34年（1959）4月に大和町（現・和光市）教育委員会によっておこなわれた（室賀・編 1959）。

1次調査には國學院大學の学生が主体的に参加していたことが報告書からわかっている（室賀・編 1959）。調査には当時、國學院大學学生であった小林達雄本学名誉教授も参加しており、後

に、小林は、本貝塚の住居址覆土中から一括出土した遺物のあり方をもとに、「吹上パターン」を提唱した（小林1974・埼玉県 1980）。なお、1次調査後、「一切の資料を国学院大学に送り」、報告書としてまとめたとされている（室賀・編 1959）。さらに、No. 346のテンバコより「大和町吹上貝塚」と書かれたメモ（写真1）が見つかったことから、本貝塚の資料が含まれているのは確実である。

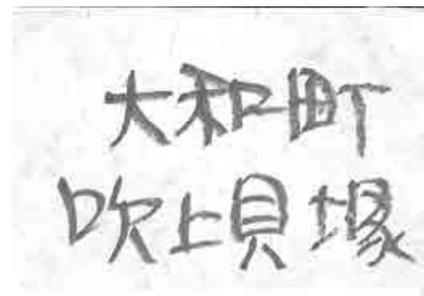


写真1 「大和町吹上貝塚」のメモ
（縦12.5cm、横18.2cm）

以上、國學院大學に関係のある3か所の遺跡を概観したが、日野吹上遺跡は、少なくとも、一連の調査で動物遺体が出土していないので、動物遺体は収蔵されている可能性はないと考えられよう。そのため、以下の分析においては、収蔵されている動物遺体が大洗吹上遺跡、あるいは和光市吹上貝塚のどちらに帰属するかに焦点を当てて検討する。(阿部)

Ⅲ 資料の概要 —ラベルの記載から推定する—

本学博物館に収納された資料の内、箱のラベルに「吹上」と記載されているテンバコは31箱ある。また、これらのテンバコには、No. 341 から372までの番号が付されている(内、No. 354は別の遺跡のもの)。その内、動物遺体は収納されているものは、No. 344・345・350・355・356・365・366・367の8箱である。これらの資料は、ラベルや注記の内容から大きく3つに分類される。以下、その分類ごとくみていく(表1)。

1. No. 345・No. 367

No. 345とNo. 367に収納されている資料のラベルには、昭和43年12月8日から13日を示すと考えられる6ケタの数字が記載されていた。また、A-9, A-10, A-11が付されているものがほとんどである。

これらの資料のラベルに記載されている調査年月日を表していると推定される数字は、大洗吹上遺跡1次調査の実施期間と一致している(上川名・編 1972)。つまり、本博物館所蔵の「吹上」遺跡出土動物遺体資料の一部も、上川名昭氏によって寄贈されたものである可能性が高い。昭和47年(1972)に刊行された報告書のなかで、動物遺体の報告がおこなわれている(上川名・編 1972)。その報告において、“A”トレンチのなかの“9”区から“11”区で動物遺体を検出している点でも、本学資料の注記と一致している。つまり、2箱のテンバコに収納されている資料は、茨城県大洗吹上遺跡のものとして推定される。

2. No. 355・No. 365・No. 366

No. 355・365・366に収納されている資料のラベルには、4月18・19日を示すと考えられる“4.18”や“4.19”が記載されているものが含まれていた。また、日付と推定される注記が記載されていないものの中には、“Y○Ⅲ○”や“Y○B○”(○は2桁の数字)の注記が記載されているものもある。

埼玉県和光市(旧・大和町)吹上貝塚の1次調査は、昭和34年(1959)の4月15日から22日におこなわれている(室賀・編1959)。資料のラベルには、日付の部分に年が入っていないものの、月日は、調査期間内である。また、報告書の動物遺体の分析の記載のなかで、出土位置をあらわすと推定される記号において、“Ⅲ”や“B”が頭についている。その点は、日付のない資料のラベルの注記と一致する。つまり、以上の3箱のテンバコに収納されている資料は、埼玉県和光市吹上貝塚のものとして推定される。また、先述した「大和町吹上貝塚」(写真1)と書かれたメモが見つかったテンバコに収納されている土器の注記を観察すると、“Y”が頭についている。このことからこれらの資料群が、埼玉県和光市吹上貝塚出土のものである可能性が高い。

表1 國學院大學所蔵「吹上」遺跡出土動物遺体資料の注記一覧

テンバコNo.	注記	備考
344	水洗	
345	—	
	A-10 F-21 43.12.11	
	A-10 F-29 下顎骨 43.12.12	
	A-10 イガイ層 骨 43.12.13	
	A-10 骨片 F-19 43.12.9	
	A-11 F-26 43.12.11	
	A-11 背骨 No12 43.12.8	
	A-9 西側おちこみ こっぺん 43.12.11	
	A-9 西側おちこみ こっぺん 43.12.12	
	第1貝塚 貝サンプルA-11 431211	第1貝 A-11 S43.12.11, 第1貝層 貝サンプル A-11 43.12.11, 第1貝塚 貝サンプル A-11 43.12.11, 第一貝 A-11 S43 12.11
	イガイ層 炭化物 重要手触禁止	
	貝層サンプル 43.12.8	
	貝層サンプル 12.8	
	Fukiage site 43.12.11 11区出土	
貝層サンプル 43.12.9		
貝層サンプル 43.12.10		
貝層サンプル 43.12.11		
350	—	土器の注記：Y19A 口3 など
355	AT (口区) 下層 4.19	
356	水洗	
365	4.19 □貝層中	
	4区第一貝層 4.18	
	YⅢ43・YⅢ34	
	YⅢ43	
366	(Y16B03)	
	(Y16B03・Y19B03)	
	(Y18Ⅲ33・Y19Ⅲ33)	
	4月19 四区貝層	
	B?	骨の注記：Y19Ⅲ33
	B? (Y16B03・Y19B03)	
	Y19Ⅲ33	
	Y19Ⅲ43	
YⅢ穴?		
YA02 (3?)		
—		
367	A-9 K73 43.12.9	
	A-9 K73 43.12.11	
	A-9 西区貝層中サンプル 43.12.12	
	A-10 F-25 猪の牙 S43.12.11	
	A-10 F-28 牙 43.12.12	
	A-10 猪 No11 43.12.8	
	A-10 骨片 F-17 43.12.9	
	A-10 混貝土層骨片 43.12.11	
	A-10 混土貝層 43.12.9	
	A-11 43.12.11	
	A-11 Sample 43.12.9	
	A-11 牙 F23 43.12.11	
	A-11 牙 F24 43.12.11	
	Fukiage site 43.12.11 11区 骨	
	Fukiage site A-11 43.12.11	
	Hukiage W貝(?) A-9 43.12. 9	
	吹上 A-11 イガイ層下層 43.12.13	
	西区貝層中サンプル 43.12.12	
	吹上 A-10 キバ F28 43.12.12	
	吹上 A-11 牙 F23 43.12.11	
吹上 A-11 牙 F24 43.12.11		
吹上1 A-9西区貝層中サンプル 43.12.12		

3. No.344・No.350・No.356

No.344・350・356に収納されている動物遺体資料は残念ながらラベルがない。なお、No.350に関しては、動物遺体資料にはラベル及び注記はないが、土器には“Y19A 口3”のラベルの入っているものが一袋、そのほかのものは、それぞれの注記の頭に“Y”がついている。以上からNo.350に収納されている動物遺体資料もNo.355・365・366同様に埼玉県和光市(旧・大和町)吹上貝塚の1次調査のものである可能性が高い。No.344とNo.356は不明である。(阿部)

IV 貝種組成から推定する

次に貝種組成の類似している箱ごとに概観する(表2・3)。

1. No.345・No.367

No.345とNo.367においては、共に岩礁底に生息する貝種を主体とする組成を示す(表3)。

No.345においてまとめて貝類が収納されていた袋のラベルは、「第1貝塚 貝サンプル A-11 431211」(以下、“第1貝塚”)と「貝サンプル 43.12.8」(以下、“貝サンプル”)の2つである(表2)。

「第1貝塚」は、ムラサキインコガイ、イワガキ、アワビ類などが含まれている。

「貝サンプル」は、コシダカガンダラ、オオコシダカガンダラ、クボガイ、ヘソアキクボガイ、レイシガイ、イボニシ、イワガキ、ムラサキインコガイなどが含まれている。

2袋共に岩礁底に生息している種類が多く含まれている。また、沿岸に生息している種類が主体である。

注記のついていない資料も、イガイ科(イガイ、ムラサキインコガイ)、クボガイ類(ヘソアキクボガイ)、イワガキ、アワビ類(クロアワビ)などの沿岸の岩礁底に生息する種類が多く含まれている。また、エゾハマグリとウバガイなどの現在、太平洋側では鹿島灘以北を生息域とする貝種も含まれている(写真2)。

No.367は、No.345と同様に岩礁底に生息する種類が多く含まれている。具体的にそれらの貝種が含まれている袋のラベルは、「A-11 Sample 43.12.9」「吹上1 A-9 西区貝層中サンプル 43.12.12」「A-10 混土貝層 43.12.9」「A-10 混貝土層骨片 43.12.11」である。また、「A-10混土貝層 43.12.9」からはイソシジミが出土している(写真2)。

大洗吹上遺跡の2次調査報告での出土貝類遺体の一覧をみると、以上のような岩礁に生息する種類が主体となっている。また、現在の本遺跡東側に位置する大洗海岸は大型の礫と岩場で構成されており、イガイ類の生息も確認することができる(写真3・4)。

2. No.344・No.350・No.356 / No.355・No.365・No.366

残り6箱は、内湾域に生息している種類が主体である。以下、出土傾向で2つに分けて議論をおこなう。

2-1. No.344・350・356

ラベル及び注記のなかったNo.344・350・356に収納されている貝類は、干潟や内湾砂底・砂泥底域に生息している種類で構成されている(表3)。なお、No.344とNo.356に収納されている資料は、現場にて貝層を土壌ごとそのまま持ち帰ってきたものである。主体となる貝種は、共にイボキサゴとハマグリで、内湾砂底群集である(表2)。そのほかの貝種も内湾の干潟に生息するもので占められている。No.350もイボキサゴが含まれていないものの、先の2箱のテンバコに収納されているものと同様に内湾の砂底や砂泥底に生息しているもので占められている。

埼玉県和光市吹上貝塚は立地から、当時、周辺の海域は、内湾であり遠浅の干潟が広がっていたことが推測され、以上の3箱のテンバコに収納されている貝種の生息域と一致する。しかし、本貝塚第1次調査の報告における貝種組成をみると(室賀・編 1959:表3)、ヤマトシジミが最も出土している一方、イボキサゴが出土していない。つまり、推測される海浜環境において、これらの貝種が採集されていた可能性が高いが、第1次調査で出土した種類と大きく異なっているため、遺跡の決定には慎重を期すべきであろう。

2-2. No.355・365・366

No.355・No.365・No.366の3箱のテンバコでは、まとまった量の貝類は出土していない。しかし、No.

表2 國學院大學所蔵の「吹上」遺跡 出土貝類一覧

テンバコNo.	注記	貝種
344	水洗	◎イボキサゴ, ◎ハマグリ, サルボウガイ, ハイガイ, マテガイ, シオフキガイ, マガキ, アカニシなど
345	—	◎ヤマトシジミ, ◎イガイ科(イガイ, ムラサキインコガイ), クボガイ類(ヘソアキクボガイ), イワガキ, ハマグリ, マガキ, アワビ類(クロアワビ), エゾハマグリ, シオフキガイ, シラトリガイ類, イボニシ, ウチムラサキ, ウバガイ, カコボラ, サザエ
	第1貝塚 貝サンプルA-11 431211 貝層サンプル 43.12.8	ムラサキインコガイ, イワガキ, アワビ類, ヤマトシジミ, ハマグリ アワビ類, ベッコウガサガイ, ヨメガサガイ?, イボニシ, ◎レイシガイ, クボガイ, ヘソアキクボガイ, コシダカガンダラ, オオコシダカガンダラ, ボウシュウボラ, アカガイ類, イワガキ, マガキ, ◎イガイ科(ムラサキインコガイなど), ヤマトシジミ, サビシラトリ, シオフキガイ, ハマグリ, カコボラ?
350	—	マガキ, サルボウガイ, ハイガイ, マテガイ, アサリ, オキシジミ, ハマグリ, アカニシ, イボウミニナ, カワアイ, イボニシ, ツメタガイ, ナミマガシワ, オオノガイ, カガミガイ, シオフキガイ
355	AT(口区)下層 4.19	マガキ右1
356	水洗	◎イボキサゴ, ◎ハマグリ, ハイガイ, オキシジミ, マテガイ, シオフキガイ, マガキなど
365	4.19 □貝層中	ハマグリ, マガキ, シオフキガイ
	4区第一貝層 4.18 YⅢ43・YⅢ34	◎ハマグリ, マガキ, ヤマトシジミ, ツメタガイ, アカニシ ヤマトシジミ, マガキ
366	(Y16B03)	ヤマトシジミ左1
	(Y16B03・Y19B03)	サルボウガイ破片
	B?	アカニシ
	B?(Y16B03・Y19B03)	マガキ, サルボウガイ, ヤマトシジミ
	Y19Ⅲ43	◎ヤマトシジミ, マガキ
	YA02(3?)	マガキ
—	サルボウガイ, ハマグリ, マガキ, ヤマトシジミ	
367	A-10 混貝土層骨片 43.12.11	イガイ
	A-10 混土貝層 43.12.9	ヘソアキクボガイ, レイシガイ, ボウシュウボラ?, カワニナ, マガキ, イガイ, イソシジミ, クボガイ, ヤマトシジミ
	A-11 Sample 43.12.9	◎イワガキ, ヤツシロガイ科, ヘソアキクボガイ, レイシガイ, イボニシ, ハマグリ, マガキ
	吹上I A-9 西区貝層中サンプル 43.12.12	ヘソアキクボガイ, ウラシマガイ?

◎:特に多く含まれている貝種。



写真2 國學院大學所蔵の「吹上」遺跡出土の貝類遺体の一部

- 1:カコボラ 2:クボガイ 3:オオコシダカガンダラ 4:エゾハマグリ 左殻 5:イソシジミ 左殻
 6:ウチムラサキ 左殻 7:ウバガイ 左殻 8:イワガキ 左殻 9:イガイ科 右殻
 10:ムラサキインコガイ 左殻

1、4、6、7、9 (テンバコ No. 345 ラベルなし)
 2、3、8、10 (テンバコ No. 345 貝サンプル 12.8)
 5 (テンバコ No. 367 A-10 混土貝層 43.12.9)



写真3 大洗海岸 遠景



写真4 現大洗海岸におけるイガイ類
生息状況

345 とNo. 367 でみられた沿岸に生息している種類は含まれておらず、汽水域のヤマトシジミと内湾の干潟に生息している種類で構成されている。つまり、含まれている貝種は、和光市吹上貝塚第1次調査に挙げられている結果に近い。

2-3. 小結

No. 344・350・356の貝類は、生息域と推測される和光市吹上貝塚周辺の当時の海浜環境から、本貝塚のものである可能性が高い。しかし、本貝塚の一次調査に報告されている貝種組成と一致しないことから、引き続き慎重に検討する必要がある。一方、No. 355・365・366については、報告されているものとほぼ一致がみられることから、和光市吹上貝塚のものと考えられる。(阿部・猪熊)

V 共伴する人工遺物から推定する

No. 350・No. 355・No. 365のテンバコには土器、No. 366のテンバコには石器・石材が動物遺体と共に収納されていた。また、これら4箱のテンバコ内の人工遺物にはほぼ全点に注記が付されている。その内容は「Y」・「Y16A 口3」・「Y19A 口3」で、すべて頭に“Y”がつく。さらに、No. 350・No. 355の遺物にはそれぞれ「Y19A 口3」、「AT(口区)下層 4.19」と書かれたラベルが共に入っていた。Ⅲ章の分析の結果から、これらは和光市吹上貝塚の遺物であると考えられる。

以上、Ⅳ章までの検証作業の補完として人工遺物に関して分析をおこなう。

1. 土器 (写真5)

1-1. No.350

本テンバコの土器はすべて破片資料である。時期は縄文時代中期が主体であり、阿玉台式・加曾利E式といった型式がみられる。また、羽状縄文のつけられた前期の土器や薄手の後期の土器もみられる。

1-2. No.355・No.365

本テンバコの土器は縄文時代中期・後期のものが主体を占めている。型式としては阿玉台式・加曾利E式・堀之内式がみられる。また、1点ではあるが土器片錘とみられる阿玉台式の土器片も含まれている。

1-3. 小結

1次調査の報告書によれば、和光市吹上貝塚ではA地点で茅山式・鶴ガ島台式・黒浜式・阿玉台式・勝坂式・加曾利E式が、B地点で黒浜式・勝坂式・加曾利E式・加曾利B式と、早期～後期にかけての土器が出土している(室賀・編1959)。注記からNo. 350・No. 355・No. 365の土器は和光市吹上貝塚のものと推定されたが、型式においても報告書のものとの間に相違はほぼ認められない。このことから、3箱のテンバコに収納されていた土器は和光市吹上貝塚の資料であると考えられる。

2. 石器・石材 (写真6)

2-1. No.366

本テンバコには石器と石材と考えられる礫が収納されている(以下、“自然礫”とする)。

まず、自然礫の材質は頁岩・砂岩・チャート・結晶片岩・緑色片岩・軽石などである。これらはすべ

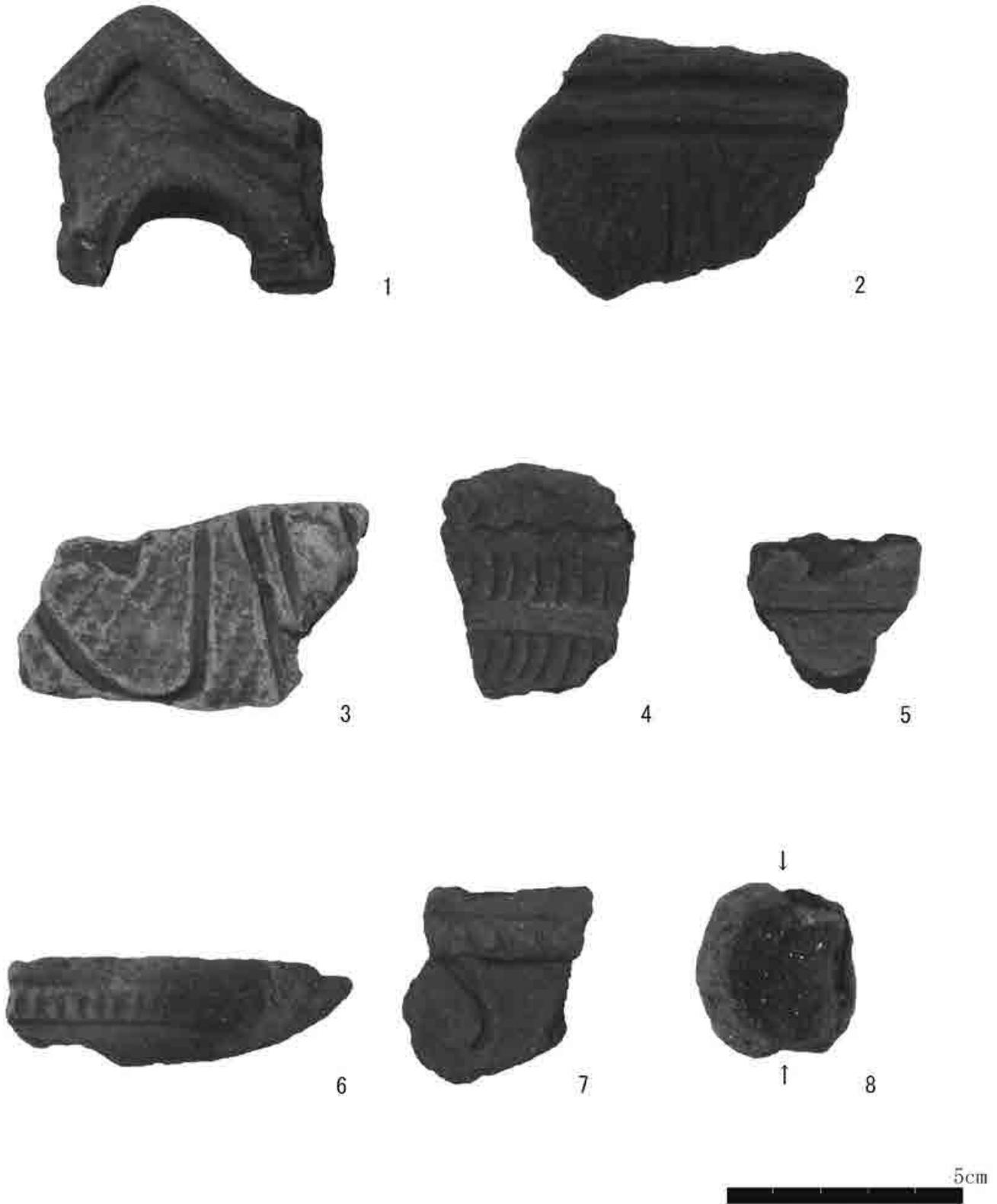


写真5 國學院大學所蔵の「吹上」遺跡出土の土器の一部

1:テンバコ No. 355 2:テンバコ No. 350 3:テンバコ No. 350 4:テンバコ No. 365
 5:テンバコ No. 350 6:テンバコ No. 355 7:テンバコ No. 355 8:土器片錘 テンバコ No. 365



写真6 國學院大學所蔵の「吹上」遺跡出土の石器の一部

1～3：博物館所蔵の石器（テンバコ No. 366）

4・5：博物館所蔵の石材（テンバコ No. 366）

6・7：大洗吹上遺跡 表面採集品

ていわゆる角礫である(写真6-4・5)。次に石器は敲石・磨石・石斧と考えられるものが含まれており、石材はすべて砂岩である。

2-2. 小結

No. 366の資料(以下、No. 366資料)は器種とみられるものが非常に少なく、大洗吹上遺跡、和光市吹上貝塚ともに報告書に記載された器種組成との比較はできなかった(註1)。また、石材についても両報告共にNo. 366資料と明瞭な違いは認められなかった。そのため、報告書に記載された石器の器種・石材からはNo. 366資料がどちらの遺跡に帰属するものかを判断することができない。

そこで、No. 366資料と筆者らが、大洗吹上遺跡で表面採集した資料(以下、大洗表採資料:写真6-6・7)と、特に石材の観点での比較をおこなった。大洗表採資料の石材は頁岩と砂岩であった。またチャートの原石も2点含まれていた。大洗表採資料とNo. 366資料とは、材質の面で大きな違いはない。一方で、石材の形状には違いがみられる。大洗表採資料は全体として丸みを帯びているのに対して、No. 366資料は角礫である。遺跡に近い大洗海岸は径10~20cm程の大量の円礫を主体とする砂礫質の海岸である(写真3)。大洗表採資料は形状をはじめ、サイズ・材質もこの海岸礫に非常に似通っている。このことから、大洗吹上遺跡では石材の供給を大洗の海岸でおこなっていたものと推測される。一方で、和光市吹上貝塚は当時の奥東京湾の湾央西岸に位置し、近接する海岸は内湾砂泥底域であったことが推定されている(埼玉県1987)。このようなことから、和光市吹上貝塚では身近な環境から円礫を獲得するのは難しかったと考えられる。

以上のように、No. 366内の石器・石材は石材の形状から、少なくとも大洗吹上遺跡の出土品ではない。また、注記からもNo. 366資料は和光市吹上貝塚のものであると推測される。これらのことから本資料は和光市吹上貝塚のものである可能性が高い。

3. 結論

以上の一連の分析からNo. 350・No. 355・No. 365・No. 366の土器、石器・石材は、和光市吹上貝塚の資料であると考えられる。(猪熊)

VI 資料と共に持ち込まれた土壌からの分析 —粒度分析— (表4)

予備実験の結果、大洗吹上遺跡の表土の場合、0.05mm以下の土壌が含まれている。対して、和光市吹上貝塚の表土の場合、0.13mm以下の土壌を検出することができず、大洗吹上遺跡よりも粒度が大きい傾向がみられた。この差異は、それぞれの遺跡が立地する地質に由来すると考えられる。遺跡の立地

表4 粒度分析 結果一覧

サンプル名	分析量	1mm以下	0.5mm以下	0.3mm以下	0.13mm以下	0.10mm以下	0.07mm以下	0.05mm以下	合計(0.05mm以下)
大洗(現在)	30 ml	13.2	1.8	12	0.9	0.4	0.7	1.0	16.8
和光(現在①)	30 ml	26.3	2.6	1.1	×	×	×	×	3.7
和光(現在②)	30 ml	28.9	0.7	0.4	○	×	×	×	1.1
No. 356	20 ml	15.0	2.3	2.5	0.2	○	×	×	5.0
No. 345	20 ml	15.3	2.4	1.9	0.2	○	0.1	0.1	4.7

大洗以外
大洗?

○:微量 ×:無

をみると、和光市吹上貝塚は武蔵野台地、大洗吹上遺跡は大洗台地に立地する。

武蔵野台地は、多摩川の扇状地として、形成された台地であり、奥多摩の青梅市を扇頂とし、緩やかに傾斜しながら、南東に開く（和光市1981）。つまり、台地を形成する土壌の由来は、多摩川が削り取った山砂である。一般的に扇状地の土壌は、粒度が大きくなり、今回の結果と調和的と言える。

大洗台地は、古第三紀または白亜紀後期の大洗層を基部として、更新世での波食台の形成や河谷の堆積を由来とする砂質の見和層、その上部にローム層、現在の沖積層で構成している（坂本1975）。特に大洗台地東部では、風成砂の堆積が著しく、祝町小学校のボーリング調査においても、表土に砂丘砂が厚く覆っている。大洗台地に供給される土壌は、風成砂の海砂などが想定され、扇状地由来の山砂よりも細かい粒度と考えられる。

この傾向は、遺構の覆土にも反映していると考えられ、土壌の粒度組成より、由来とされる遺跡を推定することが可能と示唆される。

分析を行った土壌サンプルは、No. 345とNo. 356である。それぞれ、20mlを抽出し、分析の対象とした。

分析の結果、No. 345では、50 μ m以下の土壌まで含まれており、粒度組成からみると和光市吹上貝塚の由来と考えるよりも、大洗吹上遺跡に類似的である。No.356では、0.13mm～0.10mmの土壌を僅かに含んでいるが、0.1mm以上の粒度が主体であり、粒度組成からみると大洗吹上遺跡の由来と考えるよりも、和光市吹上貝塚に近似する。しかしながら、現在の和光市吹上貝塚の表土では検出できなかった0.1mmの土壌も僅かに含まれており、No. 356は和光市吹上貝塚とは断定し難く、あくまでもNo. 345と大洗吹上遺跡とは異なる土粒組成を示す。

以上の結果をまとめると、No. 345とNo. 356では粒度組成に差異がみられ、土壌の由来が異なる。No. 345は大洗吹上遺跡、No. 356は和光市吹上貝塚に似た粒度組成であった。ただし、今回の分析は実験的・簡易的のものであり、遺跡の決定には今後も継続的な分析調査ならびに事例を増やす必要がある。（畑山）

Ⅶ 結果

以上、4つの分析をおこなった結果、本学博物館所蔵の「吹上」遺跡の資料は、茨城県大洗町吹上遺跡と埼玉県和光市（旧大和町）吹上貝塚の2つの遺跡のものに当たる可能性を指摘した。一連の分析結果は、表5にまとめた。

表5 本論における一連の分析結果

テンバコNo.	Ⅲ ラベル・注記	Ⅳ 貝種組成	Ⅴ 人工遺物（注記）		Ⅵ 土壌分析
			土器	石材	
344	×	△内湾砂泥底域	×	×	×
345	大洗	岩礫域 [大洗?]	×	×	[大洗?]
350	×	△内湾砂泥底域	和光	×	×
355	和光	汽水・内湾砂泥底 [和光?]	和光	×	×
356	×	△内湾砂泥底域	×	×	☆
365	和光	汽水・内湾砂泥底 [和光?]	和光	×	×
366	和光	汽水・内湾砂泥底 [和光?]	×	和光	×
367	大洗	岩礫域 [大洗?]	×	×	×

大洗：大洗吹上遺跡と推定 和光：和光市吹上貝塚と推定 ×：分析をしていないもの
 ☆：少なくとも大洗吹上遺跡のものではない。

まず、No. 345とNo. 367が大洗吹上遺跡のものであることを、ラベルと注記、貝種組成から推測した。なお、No. 345の土壌分析の結果は、和光市吹上貝塚よりも大洗吹上遺跡に近い傾向を示した。

No. 355・365・366は、ラベルと注記から和光市吹上貝塚であることを推測した。貝種組成に関しては、汽水域、干潟や内湾砂底域に生息している種類で構成されていることから、本貝塚第1次調査の報告とほぼ同じ傾向を示している。

残るNo. 344・350・356に関してはラベルや注記がないため確定できなかった。また、No. 344と356は、貝種組成において内湾砂底域生息種であるイボキサゴとハマグリを主体とした干潟と内湾砂底域生息種で構成されている。推測される当時の和光市吹上貝塚周辺の海浜環境との比較から本貝塚の資料である可能性を指摘した。ただし、本貝塚1次調査の報告では汽水域に生息するヤマトシジミが主体である一方で、イボキサゴが出土していない点でこの2つの資料と大きく異なる。残るNo. 350は、No. 344と356と同様の干潟及び内湾砂底生息種で占められている一方、ヤマトシジミが含まれていない点で和光市吹上貝塚のものとは断定しにくい。しかし、No. 350は、共に収納されていた土器の注記から、和光市吹上貝塚のものとは推定された。なお、No. 356に関して土壌分析の結果から、少なくとも大洗吹上遺跡より和光市吹上貝塚に近い結果が示された。

(阿部・山崎・猪熊・畑山)

Ⅷ 課題と整理計画

以上の分析により、國學院大學博物館収蔵の「吹上」遺跡資料は大きく、大洗吹上遺跡と和光市吹上貝塚の資料の2つに分けられることが示された。今後は、今回の事前調査の結果をもとに2つの遺跡ごとに整理、報告をおこなう予定である。

今後の整理計画としては、まず、No. 345・367に関しては、大洗吹上遺跡資料として、本館に収蔵されている上川名コレクションとあわせて、整理・報告をおこなう。それに対して、そのほかの6つの資料に関しては、和光市吹上貝塚として整理・報告したい。あわせて、No. 344、356に関しては、帰属する遺跡についての検討も引き続きおこなう予定である。

(阿部・山崎・猪熊・畑山)

謝辞

本学大学院の入江直毅、小林美貴、佐賀桃子、石川蒼各氏には、土器及び石器を整理する際にご教示いただいた。また、大洗町教育委員会には資料をご提供いただいた。ご芳名を記して、謝意に変えたい。

註

1) 報告書によると大洗吹上遺跡では、石錘・磨石・凹石・石槍・打製石斧・磨製石斧が出土しており、石材は砂岩が主体である(上川名・編 1972)。一方、和光市吹上貝塚では、磨石・凹石・打製石斧・磨製石斧・尖頭器様の石器・スクレイパー様の石器・石鎌が出土している(室賀・編 1959)。なお、大洗表採資料には、石錘4点と敲石、磨石、凹石の複合石器2点、円礫が含まれていた。

参考文献

- 上川名昭・編 1970『日野吹上遺跡』日野市吹上遺跡調査会
- 上川名昭・編 1972『大洗吹上遺跡』大洗吹上遺跡調査団
- 國學院大學考古学資料館 2005『國學院大學考古学資料館要覧 2005 上川名昭氏旧蔵資料』
- 小林達雄 1974「縄文世界における土器の廃棄について」『国史学』第93号 国史学会 pp.1-14
- 埼玉県 1980『新編埼玉県史 資料編1 原始 旧石器・縄文』
- 埼玉県 1987『新編埼玉県史 通史編1 原始古代』
- 酒詰仲男 1961『日本縄文石器時代食料総説』土曜会
- 坂本 亨 1975「磯浜地域の地質」『地域地質研究 東京（8）第22号』工業技術院地質調査研究所 pp.1-55
- 富岡直人 1999「第6章 貝類」西本豊弘・松井 章・編『考古学と自然科学② 考古学と動物学』同成社 pp.89-117
- 日野市遺跡調査会・編 1989「7. 吹上遺跡 第10次調査」『日野市埋蔵文化財発掘調査輯報V』日野市教育委員会
- 日野市遺跡調査団・編 1976『日野市吹上遺跡第V次発掘調査概報 一第1地区～第4地区一』日野市遺跡調査会・日野市教育委員会
- 波部忠重・奥谷喬司・監修 1983a『学研生物図鑑 貝I〔巻貝〕』学習研究社
- 波部忠重・奥谷喬司・監修 1983b『学研生物図鑑 貝II〔二枚貝・陸貝・イカ・タコほか〕』学習研究社
- 松島義章 1985『先史時代の自然環境 縄文時代の自然史』東京美術
- 宮田 毅・編 1979『大洗町文化財調査報告書 第6集 茨城県吹上遺跡 一第三次発掘調査の記録一』グリーン大洗 緑水園・茨城県大洗町教育委員会
- 室賀茂美・編 1959『郷土誌資料第三集 大和町のむかし“吹上貝塚”』大和町教育委員会
- 和光市 1981『和光市史 史料第一 自然・原始・古代・中世・近世』

- 1) 國學院大學学術資料センター 客員研究員
- 2) 國學院大學文学部史学科 学生
- 3) 埼玉大学大学院文化科学研究科 博士課程
- 4) いわき短期大学幼児教育科 教授